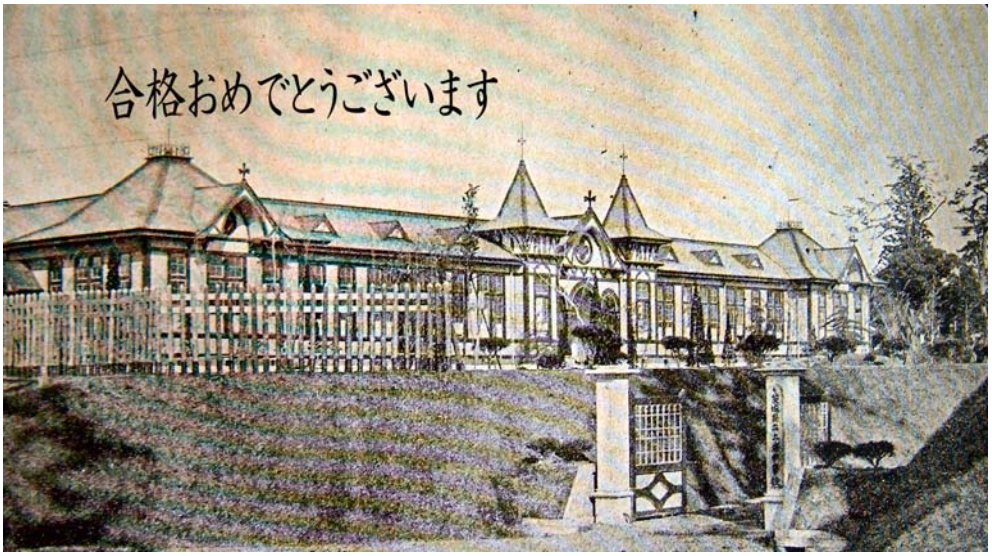


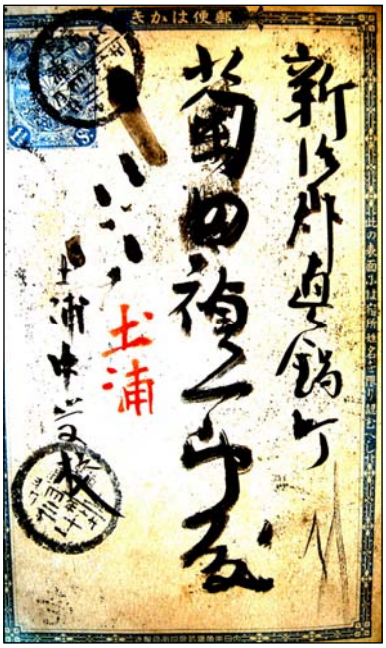
Acanthus

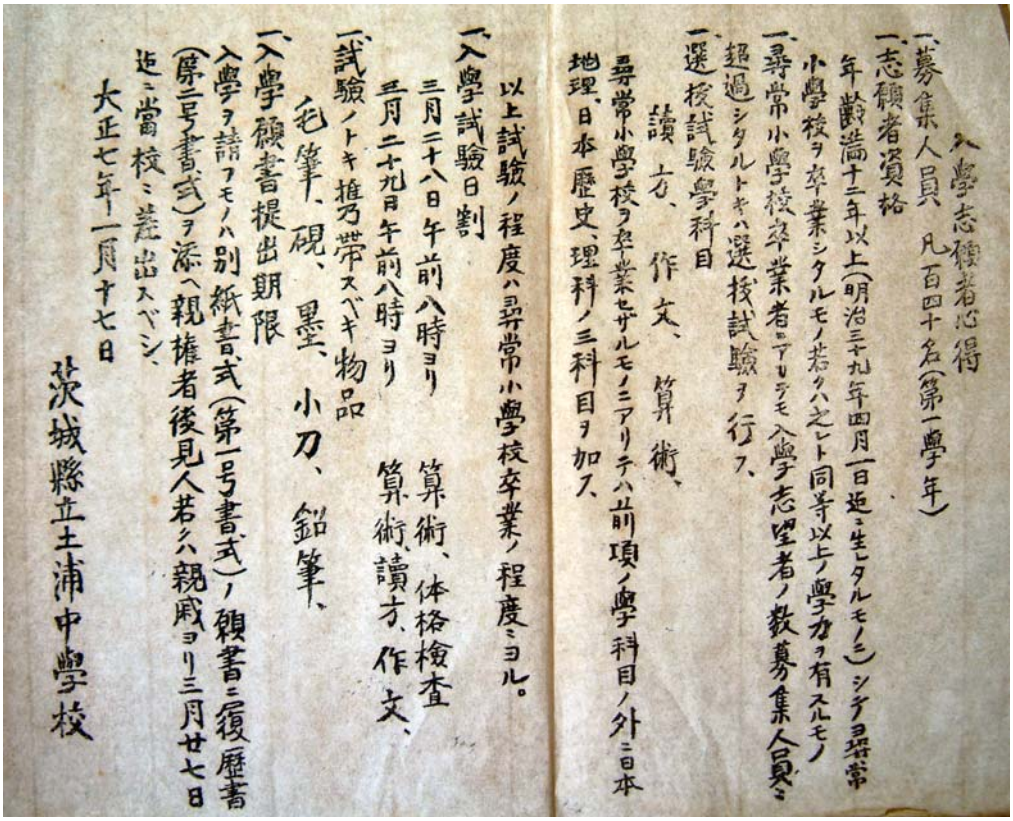
新入生歓迎号

平成20年3月21日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

左の写真は今から百年余り前（明治38年ごろ）の本校です。学校の創立は111年前の明治30年，茨城県立尋常中学校土浦分校として産声をあげました。大変歴史の古い学校なのです。このような全国有数の伝統校の一員になられた皆さんを心から歓迎いたします。





入學志願者心得

一、募集人員　凡百四十名（第一學年）

一、志願者資格
年齡滿十二年以上（明治三十九年四月一日迄ニ生ニタルモノニ）シテ尋常小學校ヲ卒業シタルモノ若クハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノ

一、尋常小學校卒業者ニアラサルモ入學志望者ノ數募集人員ニ超過シタルトキハ選拔試驗ヲ行フ、

一、選拔試驗學科目
讀方、作文、算術、
尋常小學校ヲ卒業セサルモノニアリテハ前項ノ學科目ノ外ニ日本地理、日本歷史、理科ノ三科目ヲ加フ、

以上試驗ノ程度ハ尋常小學校卒業ノ程度ニヨル。

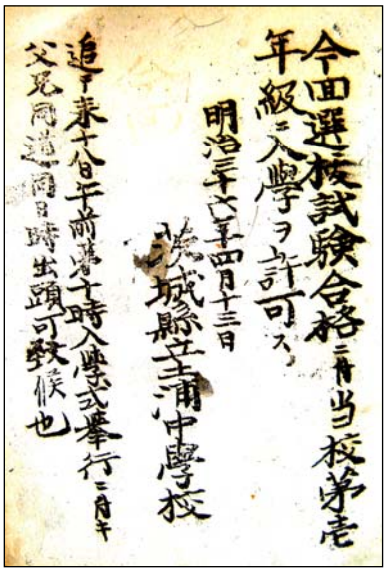
一、入學試驗日割
三月二十八日午前八時ヨリ　算術、体格檢査
三月二十九日午前八時ヨリ　算術、讀方、作文、

一、試驗ノトキ携帶スベキ物品
毛筆、硯、墨、小刀、鉛筆、

一、入學願書提出期限
入學ヲ請フモノハ別紙書式（第一号書式）ノ願書ニ履歷書（第二号書式）ヲ添ヘ親權者後見人若クハ親戚ヨリ三月廿七日迄ニ當校ニ差出スベシ、

大正七年一月十七日
茨城縣立土浦中學校

大正七年度の入学志願者心得　→



今回選拔試驗合格ニ付當校第壹年級ニ入學ヲ許可ス、
明治三十七年四月十三日
茨城縣立土浦中學校

追テ来十日午前第十時入學式擧行ニ付キ父兄同道ノ上時刻ニ出頭可致候也

明治三十六年度の合格通知・入学許可書　←

合格通知書
327名の諸君に！

『茨城県立土浦中学校に合格したことを通知します』

左二つの資料は、明治36年4月13日付けの本校合格を通知した郵便はがきです。

平成20年3月12日、茨城県立土浦第一高等学校の合格通知書を手にしたとき、どんな感慨が込み上げてきましたか。資料の土浦中学校合格通知書を手にした菊田禎一郎さん（菊田君では失礼ですね。本校の大先輩ですから）も皆さんと同じ思いで、幾度となく読み返したことと思います。

明治30（1897）年以来、同じ感慨に身を委ね、未来に大きな夢を羽ばたかせた少年が毎年春には生まれました。

そして今、君たち327名は同じように夢と希望を抱く百十二回目の少年となったのです。合格を心からお祝いすると共にこれから一高での限りない可能性への挑戦を期待します。

試験場には小刀を携えて？

まだ、入学試験の余韻をもつ人もいるでしょう。県内でも屈指の難関校を突破してきたわけですから、その達成感は格別なものと思います。

上の資料は、明治・大正期における本校（もっぱら土中といいました）の「入学志願者心得」です。募集人員はおよそ百四十名とあります。当時の倍率は例年5倍前後といわれていましたから、かなり厳しい入試であったことは今と変わりませんね。

入試科目は**読方・作文・算術**とあり、小学校を卒業していない受験生には、さらに**日本地理・日本歴史・理科**の3科目を加えるとしています。

試験場への携行品として**毛筆・硯**（すずり）**・墨・小刀・鉛筆**と記されているあたりに、時代を感じますね。

このような古い事柄に出会うことができるのも伝統校ならではと言えましょう。

旧中学校校章

高校校章

Acanthus

第１号

平成20年４月21日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

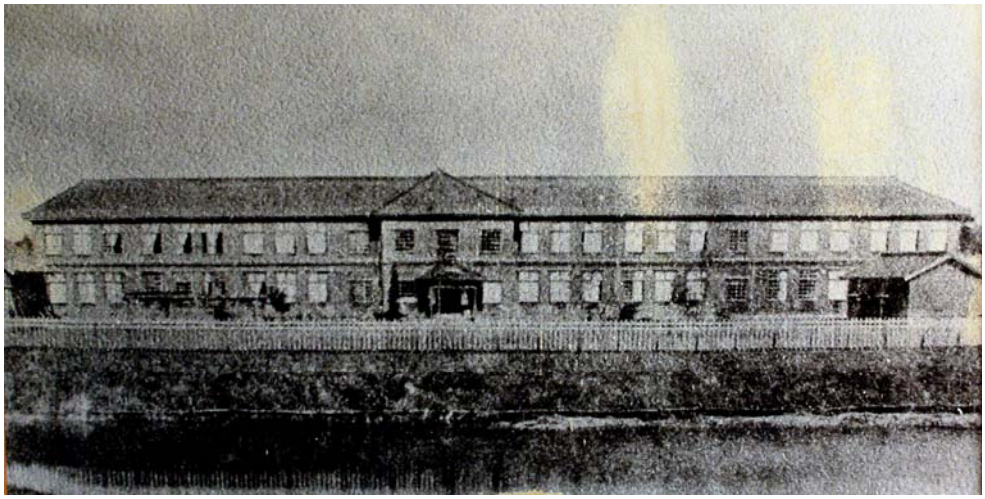
明治29年の第19回通常県会で30年度予算案が審議され，土浦分校費3,889円2銭･下妻分校費 3,096 円76銭を含む予算が議決された。分校開設は校舎新築を待たずに明治30年度の設置が決定しました。左の写真は茨城県尋常中学校土浦分校開校時，教室として使用された新治郡役所（現在の亀城公園内にあった。写真右手前には今でも公園のシンボルになっている本丸櫓門がみられる）です。

土浦分校の初年度経費 三、八八九円二銭

４月22日は、茨城県立土浦第一高等学校の創立記念日です。在校生諸君にとっては嬉しいプレゼントですね。特に新入生にとっては、いろいろな意味で格別かな？　諸君のなかには、今年は、４月21日か５月２日だったらとか、いやそれよりも毎年連休の中の授業日にスライドできるといいな等など思っている人もいるかも知れませんね。かく言う筆者もそんなことを考えたことがあります。最近は、学校や一般企業も創立・創業記念日を、必ずしも授業や事業の開始日としない例が多いようです。

土浦一高の創立記念日は、どんなかたちで制定されたのか？　それは、実に簡にして明瞭。明治30（１８９７）年４月22日、茨城県中学校土浦分校が新治郡役所楼上で授業を開始した日を根拠にしている。即ち、志願者193名から選抜した80名を第一回生として授業を始めた日である。三年後の33年３月には、文部省告示で、茨城県土浦中学校として独立が承認され、同年４月、法制上土浦中学校が誕生した。この年、第４回生を迎え、全生徒数は四百余名となった。その後、明治40（１９０７）年、幸津国太郎校長は、創立記念日を４月22日と定め、同年12月に開校十周年記念式典が挙行された。それは、創立以来の流浪の旅に終止符を打ち、明治37（１９０４）年、松並木が連なる陸前浜街道に沿った真鍋台の新校舎竣工３年目のことであった。

さて、母校の流浪の旅のことであるが、郡役所での授業は二ヵ月で終わり、その後は、土浦尋常小学校に間借りしたり、翌年４月には、２年生は内西町（現関東つくば銀行駐車場）の民家の仮校舎で、更に翌々年になると、一年甲乙両組は土浦尋常小学校女子部校舎に、丙組は郡役所で授業を受けるという状態であった。



左の写真は明治３３年に完成した土浦中学校校舎
明治３８年，中学校が真鍋台に移転した後は，土浦高等女学校校舎として，戦後は土浦第二高等学校の校舎として昭和４４(1969）年に取り壊されるまでの６５年間愛された校舎である。

初代校長になった福山義春先生は
就任時、何歳だったでしょう？

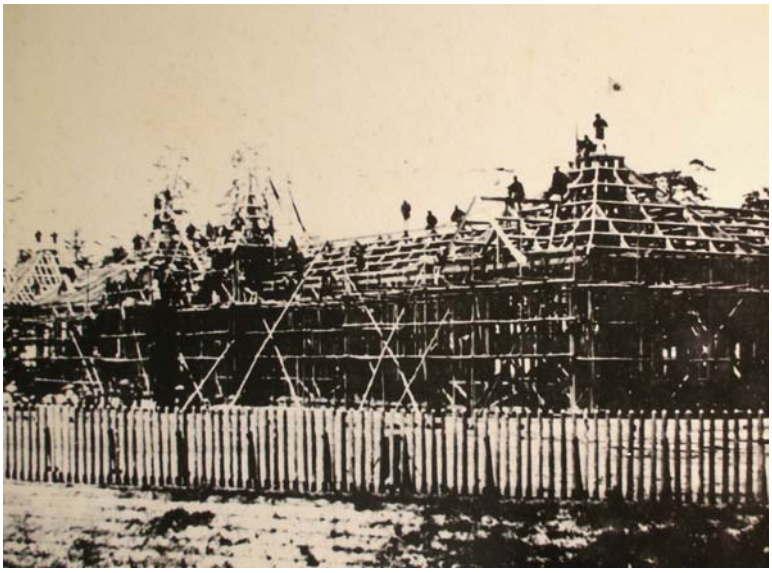
該当するものを選んでください。

①　福田首相と同年齢
②　首相就任時の安倍前首相と同年齢
③　ヤンキースの松井選手と同年齢
④　ドジャース移籍時の野茂投手と同年齢
⑤　金メダリスト荒川静香と同年齢

更に学年進行に伴う学級増によって転々と仮住まいを余儀なくされていた。やがて明治32（１８９９）年12月には、全生徒（１～３年生）が共に学べる洋風瓦葺二階建（バラック様式）の新校舎が立田町に完成し、安住の地を得た。しかし、折りしも土浦に高等女学校が設立されることになり、この校舎は女学校に引き継がれることになった。そのため、放浪の旅はいま暫く続くことになったのである。

教育に熱心であった当時の県知事は、県予算の６割程の巨費を投じ、真鍋台に今までとは趣を異にする中学校校舎を建設した。明治38（１９０５）年４月、さ迷える土浦中学校は、立田町から真鍋台に移転し、新たな歩みを始めたのである。ここに『アカンサスの学び舎』は完成した。そして今や、生徒諸君が国指定重文の単なる建造物『アカンサスの学び舎』ではなく、名実共に誇り高い『アカンサスの校風』を作り上げようと努めている姿に敬意を表したい。

真鍋台新校舎上棟式（明治37年7月5日）



Acanthus

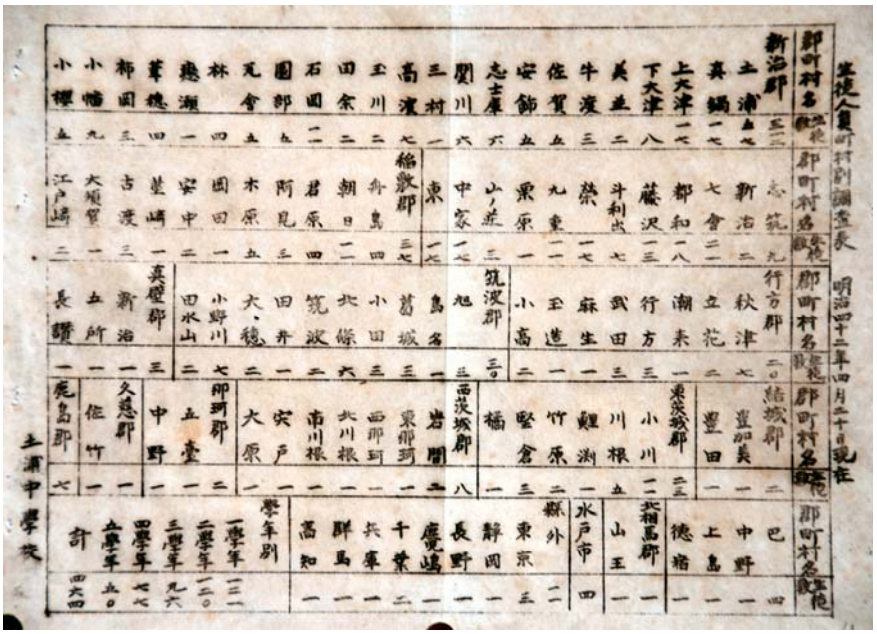
第2号

平成20年5月17日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

現在の在校生979名中，350名が自転車通学

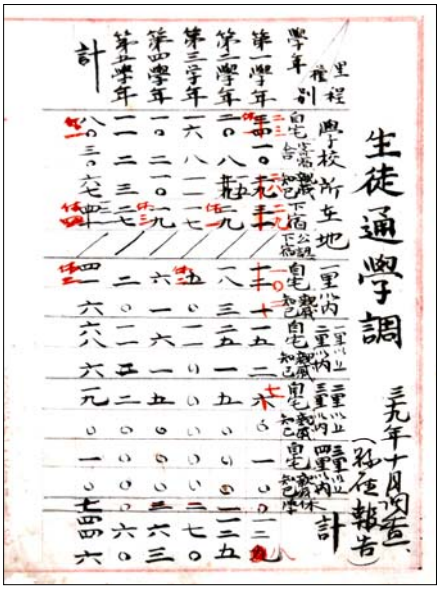
新学期が始まって早2か月になろうとしています。在校生諸君は各学年それぞれ新しい校内生活にも慣れて来たころと思います。特に1年生にとっては，入学式翌日のオリエンテーションや入門合宿で受けた安堵・不安・戸惑いなどを実感したり，払拭したりしている時期でしょう。更には毎日の登下校にも慣れてきたころでしょう。　今回は，創立10年前後，明治42年頃の「アカンサスの学び舎」の先輩諸兄の様子を出身地や通学方法などから垣間見ようと思います。



生徒人員町村別調査表　明治四十二年四月二十日現在　土浦中學校

生徒通学調（明治三十九年十月）　→

生徒人員町村別調査票（明治四十二年四月）　←



生徒通學調　三九年十月內查

高知や鹿児島からも土中へ

先ず、生徒の募集範囲は、左上の資料から推測すると、現在本県で実施されている全県一学区制と同じようなものであったようだ。それは、出身地に水戸市・久慈郡佐竹や鹿島・結城郡などが記されていることから想像される。否、東京・静岡、遠くは鹿児嶋・高知など県外出身地（11名）も記されていることから、全国に及んでいたようである（明治42年、生徒総数464名）。当時から土浦中学校はそれほど全国に名を馳せていたのであろうか？

他県からの入学者があったのは、参勤交代が行われた幕藩体制の名残とも考えられる。各大名は、江戸に藩邸を持ち、家臣をも在府させた。そこで藩の枠を越えた婚姻が行われたとしても不思議ではない。例えば乃木希典大将は山口県出身であるが、母親は土浦市の東光寺に眠っている。これは土屋藩（土浦）藩士の娘さんが長州萩藩士の乃木家に嫁したからである。このような事例に接すると、長野や高知・鹿児嶋県の子弟が土浦中学校に入学してくる理由は想像できるが、どうだろうか？　最近の遠距離恋愛を思わせるが、趣は大いに異にすると思う。

なお、右上の資料・通学調査によると学校所在地（土浦・真鍋両町を指すと考えられる）を通学圏とする生徒は298名、その宿所は自宅・寄宿舎・親戚・知己・下宿等である。学校所在地以外で1里（約4km）以内の自宅・親戚・知人宅から通学する者47名、同じく1里以上2里以内の者74名、残り20名は自宅通学者で19名が2里以上3里以内、1名は3里以上4里以内の遠距離を通学していた。この遠距離通学者は1年生である。この後、この先輩は5年間もこの遠距離を通学したのだろうか。当時の通学手段を考え合わせると、驚かざるを得ない。

常磐線は開通したが・・・

通学手段に関する資料は見つかっていないが、交通機関の整備状況から、上記の生徒たちの大部分は徒歩通学であったと想像される。明治31年には、東京田端～岩沼間（常磐線、土浦・上野間51銭）が開通しているので、これを利用した生徒がいたかも知れない。しかし、運賃は下宿するよりもはるかに高額であったと思われるし、この鉄道の主たる目的が常磐炭鉱の石炭を京浜工業地帯に輸送することにあったから、通学手段としての利便性には疑問がある。また、霞ヶ浦舟運も少しは考えられるが、はたしてどうだったろうか。筑波鉄道（現廃線）の開通も、乗合バスの運行開始も大正の中ごろである。現在最も一般的な通学手段である自転車（三輪車と言われている）も明治35年に土浦町に初めて出現して人々を驚かしたとのことだから、普及していたとは考えにくい。従って多大な体力と長時間を費やして徒歩通学した先輩が多くいたと推測できる。にもかかわらず先輩たちは勉学はもとより課外活動にも熱中していた。

なお、寄宿舎は真鍋校舎に移った年に民家を借りて収容人員15名で始まり、その後、55名まで増えた。しかし、家主の都合で一部解約されたため収容人員が減り、成績のよい者から入寮の人選が行われるはめになったという。校内に寄宿舎が建設されたのは明治44年である。大正2年には2棟となり73名を収容できたという。建物そのものは老朽化していたものの一棟だけ昭和42年まで校庭の一角に存在していた。

ところで今年度の土浦一高の在校生979名中、自宅外通学者は0名、徒歩通学者は17名、電車・バス・自転車通学者は957名である。明治は遠くなりにけりの感を否めない。

開花し始めたアカンサス　↑

Acanthus

第3号

平成20年6月20日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

一高祭も成功裏に終わったようですね。一高祭では年毎のテーマを設定し，企画運営されるようになって久しいと聞きました。そして最近は，地球規模・人類的な今日の課題を踏まえたものをテーマにしているとも。今年は，「煌～地球の、未来の、私たちの～」，昨年のは「ＰＵＺＺＬＥ～無限につらなる僕らのピース～」でしたね。今回は，在校生諸君の一高祭にあやかって，先輩たちのエピソードを紹介しましょう。

創立２年目にして早くも自主活動

土浦中学校は、茨城県尋常中学校土浦分校として明治30年(1897)４月本校舎もなく間借り状態、しかも教場も分散状態で開校した。しかし、生徒の自主的な活動は、その創立当初から極めて活発であった。分校創立の年、既に教師と共に家族的雰囲気の中でしばしば茶話会を催し、仲間づくりが進んでいた。同年12月には、乱暴な言い方であるが、今の生徒会に似た「進修会」（正確には後に紹介）を発足させた。創立２年目（明治31年）６月、１・２年生約２００名の生徒が、自分たちの手で運動会をはるばる神立原〈註〉で開催し、成功させた。

これは、当初春に予定されていた運動会が翌年に延期された為、生徒達が自分たちで企画し開催したのである。野球２試合の後、「陸上ボート・載嚢競争・フートボール（サッカー）」が行われたという。

更に秋にも生徒達の企画で行われた。最年長の生徒でも16歳、創立２年目と言えば、五里霧中の学校生活と想像しがちだが、見事なまでの積極的な行動力と実行力を発揮していた。

ヒョットコ事件

この行動力・実行力・創意性は、創立10年目の明治39年(1906)、思わぬ事件を引き起こすことにもなった。それがヒョットコ事件である。

当時の土浦中学校の運動会は、町と一体化した一大イベントであった。特に恒例の余興は人々の期待が大きかった。日本は、明治38年(1905)、ロシアに辛勝したが、大勝気分が冷め遣らず、翌明治39年秋、土浦においても町を挙げて戦勝会が行われた。このような雰囲気の中で、３年生は秋の運動会恒例の余興を盛り上げるための出し物は如何にと知恵を絞った結果、数日前に行われた戦勝会の山車を借りて引き回すことに衆議一決した。借り受けに成功した生徒達は、学習をそっちのけにして、出し物の練習に精を出す一方、山車の屋根飾りにも種々の新たな工夫を凝らした。余興のシメを飾る３年生の「山車曳き」は、祇園囃しをＢＧＭにヒョットコとおかめの踊り手、髪はボサボサで上半身を真っ赤に染め、真っ赤な大盃をもった「生き人形」を乗せて登場し、観衆の拍手喝采を博した。〈写真右上・何分、百年前の写真なので、不鮮明です。背後に新築間もない校舎の一部が写っています〉

かくして運動会は上首尾に終わった。山車を返却するにあたって、お囃子も踊りも飾り付けもそのままに町に出て、再び人々の喝采を博した。生徒達は、町の人々からお菓子などをもらい、今日の成功を語らい、満足して帰校した。

しかし、先輩たちからは「野蛮で下品、母校の顔に泥を塗った」と抗議を受け、警察は無届けデモをしたとして事情聴取に来た。後日、県議会は猥褻行為（当世流のいわゆるワイセツとは大いに趣を異にする）をなした等々と各方面から指弾を受けてしまった。

遣沢恒猪校長は、県議会沙汰になる前に、責めを負い辞表を出し、秋田県立大館中学校に転任し、甲・乙両組の担任も県外の学校に去った。しかし、これでヒョットコ事件が収束した訳ではない。

参加者たちの汚名返上と活躍

遣沢校長は離任式で『将来一新の機を開き、以て全般の風紀を刷新することになれば私は満足である』とだけ述べ、決別の辞とした。

事件を引き起こした３年生は全員叱責を受けたものの、特別の処分はなかっただけに、遣沢校長との土浦駅頭での別れには、声をあげて泣いたという。彼らは『将来一新の機』を胸中深く秘め、汚名挽回を志し、学業に励んだ。２年後、旧制一高・二高に一躍９人も合格し、志を果たした。

事件の首謀者、同級生は、陸軍大将、海軍主計大佐、早大文学部教授、順天堂大教授、日立製作所営繕部長、銘酒酒造会社社長、代議士、洋画家、医学博士等々とそれぞれの道で大成した。これを以てヒョットコ事件は名実ともに終結したと言えよう。

〈註〉神立原の正確な場所は不明だが、ＪＲ神立駅西口に近い県道沿いに「神立原」というバス停がある。この付近であったと思われる。

Acanthus

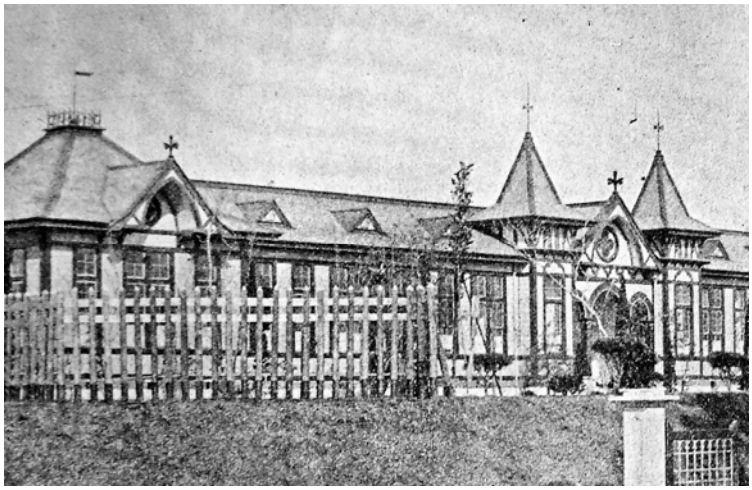
第4号

平成20年7月10日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

今回は，なぜ，小紙を『Ａｃａｎｔｈｕｓ』と称し，旧土浦中学校本館のパンフレットに『アカンサスの学舎』の副題を付けたのか。何故，それほど『アカンサス』にこだわるのか。その背景について述べてみたいと思います。

← 旧本館西側に，今を盛りと咲き競うアカンサス
（平成２０年７月３日　撮影）



『アカンサス』と『アカンサスの学舎』

旧本館には、数多くのしかも様々な装飾が施されています。その中でもこの建物のシンボル的存在と言っても過言でない装飾があります。それが「アカンサス」という植物の花と葉をモチーフにしたデザインです。

右の竣工間もない真鍋台新校舎の写真を見て下さい。正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点に十字架の様な飾りが見えますね。これこそ、かつて、四弁の花が雄大に咲き誇っている「アカンサス」そのものなのです。残念なことに、今は三つともありません。代わりに正面玄関上には貧弱？な四角錐の飾りがあるだけで、左右の破風には面影すらありません。しかし、「アカンサス」が全く消えてしまったわけではありません。正面玄関の三連アーチの柱頭部に「花」を、東西の通用口の軒の屋根には「葉」を象った装飾が現存しています。

この『アカンサスの学舎』も、いずれ全面的な解体修復が避けられません。そのときこそ、見事な四弁の花を再び雄大に掲げたいものです。ここに私達活用委員会が『アカンサス』にこだわる理由があるのです。

余計なことを少し書き足しましょう。うんざりしないで付き合って下さい。

アカンサスはラテン語で、二つの内容をもっています。一つは植物分類上の属名であり、もう一つは古代ギリシアの神殿建築の柱頭装飾の一様式を表す言葉です。植物としては、和名でキツネノマゴ科のハアザミ属。日本では、和名ハアザミよりも分類学上の属名アカンサスがよく知られています。同属は、地中海沿岸や熱帯アジアなどに約50種が分布しています。表題の『Ａｃａｎｔｈｕｓ』は地中海沿岸原産のもので、アカントゥス・スピノスス《花言葉は美術・技芸・建築》と呼ばれています。今（6～7月）を盛りに、我が旧本館西側でアザミに似た葉に包まれて咲き誇っています。上記アカントゥス・スピノススの葉は、古代建築の柱頭装飾や工芸のモチーフになったと言われています。その柱頭装飾は、紀元前5世紀末、古代ギリシアの都市国家コリントで生まれ、コリント様式と呼ばれています。世界史の教科書に必ずと言っていいほど出てくる用語です。

後2世紀に建てられたアテネのゼウス・オリュンピエイオン神殿の華麗な柱頭は著名です。ローマは征服したギリシア人に文化的には征服されたと評されています。コリント様式の神殿がローマの征服地に建てられた事は、その証左です。フランスやドイツなどには、その様式の神殿遺跡が数多く現存しています。ローマ帝国後期には、その柱頭装飾は、多様な変容を重ね、発展しました。

このアカンサス・スピノススをモチーフにした柱頭装飾は、ルネサンス時代に再び日の目を見、19世紀には、更に人気を盛り返しました。日本には、明治時代以降、洋風建築と共に導入されるようになりました。そして、前述したように本校旧本館の装飾のモチーフとして、設計者駒杵勤治㊟によって取り入れられたのです。㊟駒杵勤治氏については後日紹介します。

アカンサスの葉形を図案化した柱頭文様の一例
（平凡社刊　大百科事典）

アカンサスの意匠で飾られた玄関正面三連アーチの柱頭部
（旧土浦中学校本館パンフレット）

お詫びとお願い　小紙前号（第3号）で，「汚名挽回」と書いたことについて，読者からご注意をいただきました。「汚名は，挽回するものではなく，返上するものである」との適切なご指摘をいただきました。感謝し訂正致します。今後もこのようなご指摘は勿論，読後の感想や意見・要望などをどんどん寄せて下さい。投稿も期待しています。なお，旧本館西側花壇のアカンサスの花はちょうど今が見ごろです。

Acanthus

第5号

平成20年9月10日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

第1回一高オリンピック開会式　↑

９月は，生徒全員がアスリートとして活躍する一高オリンピックの月。一高祭で行っていた体育祭が無くなったことから，体育的行事を求める声が高まり，昭和５３年，６月に移った一高祭終了直後から「歩く会」までの間，秋空の下，ボールを蹴り，投げ，走りたいとの体育的行事を求める声が高まった。それに応え，夏休み直前に「一高オリンピック」の名称で実施が決まった。９月定期考査終了後，１・２年生による運営委員会が組織され，開催されたのがこの年（１９７８）９月１９日。今年で３１回目を迎える。

一高オリンピックへの視線

一高オリンピックは、消えた体育的行事の復活を求める声に、生徒会はアンケートを取り、実施を決定した。創設当時の生徒会顧問の木村一郎教諭は、『この行事に、私は、かつての「一高祭」における「体育祭」とは全く異なる何ものかを見出した。そこには、「祭」的要素を全く払拭した素朴な「一高オリンピック」という名に相応しく、全校生徒が競技に参加し、応援し、一人ひとりの生徒の汗と血により克ち得た得点を競うことで、クラス意識を高揚するに相応しいものを感じとった。この行事の中に、かつて土浦中学時代の先輩達が春のボートレースで一心に漕いだ精神も、今日、夢中で走り、ボールを追う精神も、形こそ異なるが、何か同じものを見つけることができるのではないだろうか。同じ学び舎に学ぶ今の生徒達も、数十年前の先輩達が追い求めていたものを、同じ心で求めているのではないだろうか』と「進修窓会報」（昭和53年刊）で述べている。

この言葉を手掛かりに先輩達のアスリートぶりを見てみよう。

昭和2年（1927）の大運動会の一コマ（進修第27号より）↑

一高オリンピック事始め

昭和53年9月19日に、第1回一高オリンピックが開催されて、今年が31回目ですね。種目は当初、バレー・ハンド・バスケット・ドッジボール・ミニサッカー・卓球・テニス・クラス対抗千米リレー（クラス担任も走る）であった。その後新たな種目も加わり、一高の三大行事として定着した。近年、人気種目であった綱引きを大縄跳びに変えるなど一高オリンピックは常に変化し続けている。

中学校時代の体育的行事

アカンサス第3号で、学校創立2年目、生徒達は自分たちの手で運動会を主催し成功させたこと、やがて土浦中学校の運動会は、町と一体化した一大イベントに発展し、土浦町周辺の人々も大きな関心と期待とをもって待ち望んでいたことを紹介した。

中学時代の体育的行事としては、春の水上運動会（ボートレース）・秋の陸上大運動会・冬の雪中行軍・柔剣道の寒稽古が行われていた。今回は秋（？）の大運動会に焦点を合わせてみよう。

大運動会事始め

公式学校行事としての運動会（第1回）は、開校3年目、明治32年5月14日に行われた。主催は進修体育部であった。翌年（明治33年）刊行の「進修」第2号には、『緑門は、千代かえぬ常盤の葉もて飾られ、竿頭百尺、数条の縄を張りかかげたる幾多の彩旗、翻翻として風に閃けり。轟然たる響きと共に大空に現れたる龍は、神立の里人が寄附せる烟花なり。喨々として佐保姫が琴の調あるは、土浦の町人が特に都より招きたる音楽隊の合奏なり。』と記され、既に土浦周辺の人々も協力し、楽しみにする行事となりつつあった。来賓も二百人余、その他見物人で広い神立原は賑わい、整理のため警察官まで出動した。

この日も野球から始まり、障害物競走、旗取り、提灯競争など11種目が行われ、余興として綱引き、玉入れ等が行われた。その後、運動会は土浦周辺の人々が楽しみとする年中行事となり、毎年春に実施され、多くの見物人を集めた。やがて、春の運動会は、陸上大運動会として秋に移った。その理由は、詳らかではないが、創立10周年の明治40年（１９０７）、新しいボートが建造され、艇庫も完成すると生徒達は、ボートレースに熱中し、オールを握らざる者は亀城健児にあらずの風潮が強まった。「進修」第12号（明治42年刊）に、『陸上大運動会評判記』と共に『水上大運動会端艇競漕を行う』という記事が載せられている。このころから、陸上大運動会は、秋に移ったものと思われる。

進修会の自治制

陸上大運動会の概要は、大体次のようなものであった。企画・運営は現在の生徒諸君が行っているのと同じように、生徒が中心になって行った。

杉の枝を組んでアーチを作り、花火をあげたり、万国旗で会場を飾りつけもした。来賓席にはテントを張り、椅子を並べた。生徒の家族や一般の見物人は、筵（むしろ）に座って観戦した。運営面では、接待・賞品・会場・風紀・売店・記録・呼び出しなどの係がおかれた。風紀係はサーベルを下げて校内を巡視した。

その粋な颯爽とした姿は、生徒達の憧れの的であったという。記録係は新聞も発行し、これを鈴を鳴らしながら観衆に配布したのである。これら運動会全体の運営は、進修会が中心になって行ったので「進修会の自治制」と自負していた。

Acanthus

第6号

平成20年10月14日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

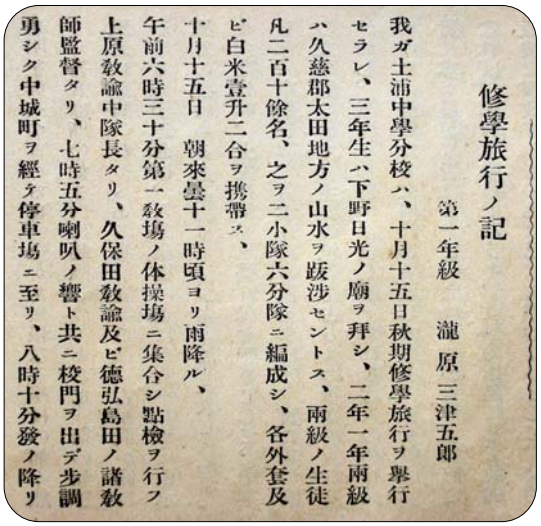
第38回歩く会（平成18年10月）

今年の「歩く会」はいかがでしたか。秋空の下，大いに楽しまれたことでしょう。「歩く会」は，全国各地の学校で行われていますが。その性格や目的は様々です。並木高校や水戸一高のように昼夜兼行で歩く心身鍛錬的なものもありますが，本校の「歩く会」はそれとは趣を異にしていますね。一高祭直後から歩く会実行委員会が，25km前後の距離を目安に交通面の安全・昼食やトイレなどの休憩場所等を検討し，いくつかのコースを設定し，アンケートも取り，委員が下見をして決定するユニークで綿密な企画運営をしています。従って毎年コースは違います。生徒の歩き方も様々です。ひたすらゴール一番のりを目指しての一人歩き，あるいはグループでお喋りを楽しんだり，道すがらいろいろな発見を楽しんだりと。「歩く会」は伝統的に行われてきた全校マラソンが，交通事情によって実施が困難になったため，これに代わるものとして，昭和48（1973）年に発足しました。さて今回は，土浦中学校時代の鍛練的修学旅行を垣間見ましょう。

分校時代の修学旅行

本校最初の修学旅行は、開校直後の明治30年6月12日に実施された筑波山への一泊徒歩旅行であった。（残念ながら、この時の詳細は不明である）

翌31年には春と秋に2回、成田・鹿島方面への修学旅行を行っている。明治31年5月24日、1・2年生約200人がラッパの音を合図に隊伍を組んで出発。銭亀橋（桜川）を渡り、小松・阿見を経て江戸崎に着き、龍承寺に泊した。翌朝利根川を越え、滑川・成田間は汽車を利用し、宗吾神社（佐倉藩の圧政を将軍に直訴した義民木内惣五郎を祀る）と成田不動尊を拝し、この地に泊る。帰途の26日は印旛沼を眺めながら、女化（牛久市）を経て、牛久駅に至り、土浦へは汽車で帰った。



修學旅行ノ記

第一年級　瀧原三津五郎

我ガ土浦中學分校ハ、十月十五日秋期修學旅行ヲ擧行セラレ、三年生ハ下野日光ノ廟ヲ拜シ、二年一年兩級ハ久慈郡太田地方ノ山水ヲ跋渉セントス、兩級ノ生徒凡二百十餘名、之ヲ二小隊六分隊ニ編成シ、各外套及ビ白米壹升二合ヲ携帶ス、

十月十五日　朝來曇十一時頃ヨリ雨降ル、

午前六時三十分第一教場ノ体操場ニ集合シ點檢ヲ行フ上原教諭中隊長タリ、久保田教諭及ビ德弘島田ノ諸教師監督タリ、七時五分喇叭ノ響ト共ニ校門ヲ出デ歩調勇シク中城町ヲ經テ停車場ニ至リ、八時十分發ノ降リ

明治三十三年九月發行

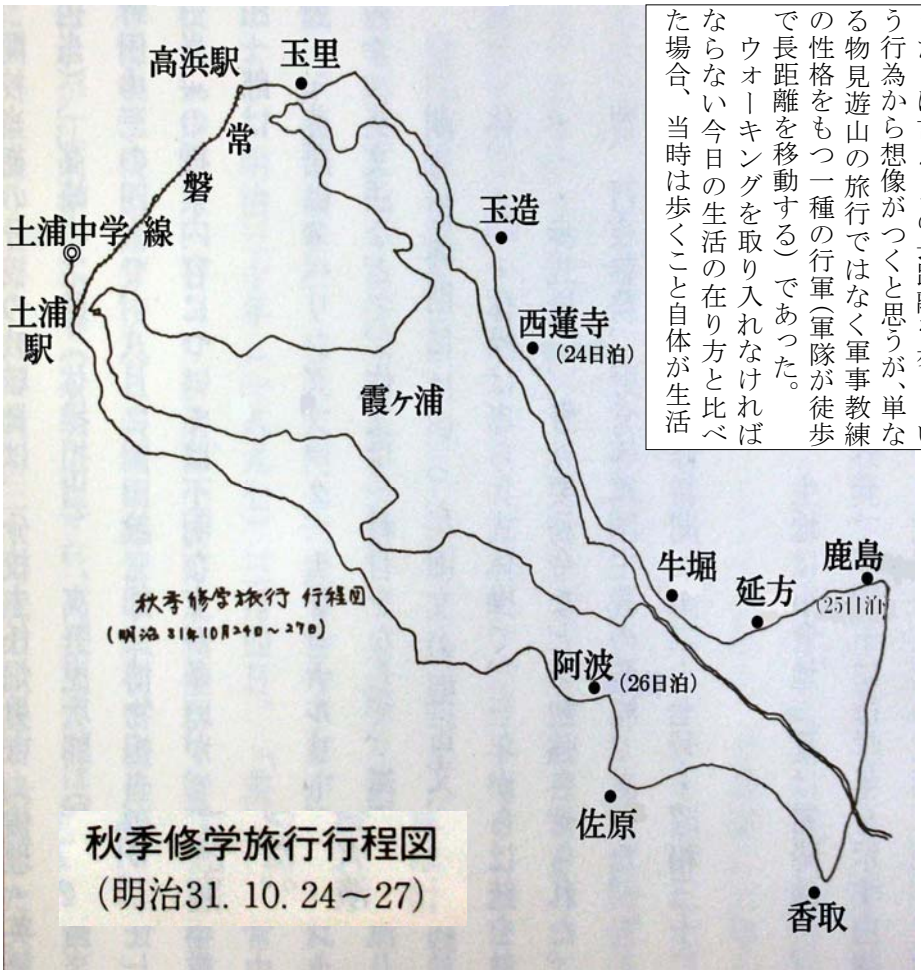
進修

第貳號

茨城縣土浦中學校進修會

「進修」第２号表紙（上）と
秋期修学旅行記（左）

霞ヶ浦一周の修学旅行行程図



同年10月には、霞ヶ浦一周3泊4日の秋季修学旅行を敢行した。土浦から高浜までは汽車、それ以降は湖岸に沿ってひたすら歩くというものであった。西蓮寺（現行方市、天台宗の寺院だが宗派の別なく尊崇を受けていた）に泊し、翌日は鹿島に至り、宿泊。3日目は香取・佐原を廻って利根川を渡り、阿波（現稲敷市）に泊り、翌4日目に土浦に帰着した。

これら2つのコースは、当時の霞ヶ浦・利根川を中心にした一連の水運の状況を実地に見聞することが出来るものであった。同時に、敬神・崇仏の心を涵養する意味があったとも想像できる。しかし、交通機関が未発達だったとは言え、この長距離を歩くという行為から想像がつくと思うが、単なる物見遊山の旅行ではなく軍事教練の性格をもつ一種の行軍（軍隊が徒歩で長距離を移動する）であった。

ウォーキングを取り入れなければならない今日の生活の在り方と比べた場合、当時は歩くこと自体が生活そのものであって、健康が生活の中で自然に維持されていたように思われる。開校3年目の10月には、3年生約50名が、日光への修学旅行を行ったが、往路の小山・栃木間と帰路の日光・宇都宮・小山間は鉄道を利用したものの、他は、6日間で60里（約230km余）を歩き切った。

分校時代、修学旅行とは銘うっているが、今でいう「歩く会」そのものであった。

それでも、当時の生徒達にとって修学旅行は一大イベントであり、大きな楽しみであった。明治期の機関誌「進修」各号には数多くの修学旅行記が掲載されている。

分校から独立した土浦中学校の修学旅行については、大正期に始まった関西修学旅行も含めて、次号で紹介したい。

筑波山登山（大正２年春）

Acanthus

第７号

平成20年11月11日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

明治33年3月，茨城県尋常中学校土浦分校は茨城県立土浦中学校として独立が認可されました。分校創立以来営々と続けられてきた様々な努力と試みによって学校の基礎が確立し，大正年間には，学校行事もほぼ定まってきました。それは，春の筑波山登山・修学旅行・水上運動会・夏休みの水泳訓練・秋の陸上運動会・冬の雪中行軍・柔剣道の寒稽古・卒業式前の予餞会等です。今回アカンサス７号では，前号に引き続き筑波山登山と修学旅行について紹介します。更に日露戦争後の満州修学旅行についても触れてみたいと思います。今の本校には修学旅行がありませんが、少なくとも戦前までは行われていました。

春の筑波へは日帰り登山

大正2年に入学した中西秀男氏（中17回卒）は、「毎年かならずやる行事の一つに春の筑波登山があった。午前6時に学校に集合して、四列側面縦隊で筑波街道を行進し、筑波神社（参拝するとすぐに登山にかかる。同時に行列はくずれて早い者がちに登り出し、男体・女体をめぐってバラバラに土浦まで帰ってくると、足弱の下級生などは日が暮れてからたどり着いたものだ。大骨折って二十何キロ（註・片道の意味か？、登山を含めて往復50㎞近い距離になる）歩くわけだが学校の行事にはいつも鍛錬という含みがあることを誰も承知していた」と回想している（創立百周年記念誌『進修百年』。）

大正5年から関西修学旅行（初めは4・5年生、後に5年生のみ）が行われるようになると、その間に1年生から4年生の全生徒が筑波登山を行った。

大正9年春の筑波登山要綱が残っている。

それによると、**午前5時までに校庭に集合、5時半出発。服装は制服、ゲートル又は脚絆、草鞋。健脚者に限り靴にても可**とある。そして、何故か**一年は和服**としている（おそらく入学したばかりで、制服が整っていなかったからか？）。**神郡**（筑波山麓）の田井小学校**までは隊列を組んで行き、昼食後登山。午後2時までに下山すること。下山後筑波駅集合、筑波駅から筑波線列車で真鍋駅に着き、そこで解散**という日程であった。

以前に比べれば、帰路は鉄道利用ということで体力的負担はかなり軽減された。

農繁期の修学旅行

当時の修学旅行は、農繁期で旅客が減り、鉄道運賃の割引率がよくなる6月に実施した。日程は一・二泊で、1年生は水戸・大洗方面、2年生は銚子・成田方面、3年生は鎌倉・江ノ島方面、4年生は日光・湯本方面、5年生は箱根・小田原方面へと学年毎に目的地も決まっていた。いずれも目的地周辺では、徒歩中心の強行軍であった。

関西修学旅行始まる

初めての関西修学旅行は、大正5年4月27日から6泊7日の日程で行われた。参加学年は4・5年生であった。

行程は、伊勢・奈良・大阪・京都と廻ったが、旅館・交通機関との交渉は引率教師が行った。6泊中2泊は車中泊であり、都市間の移動のみ鉄道を利用した。見学地はすべて徒歩であり、大津・坂本から比叡山を越えて京都に入るコースは大変な強行軍であった。そのため、生徒達は帰りの車中では死んだように眠っていたという。また、引率教師もこの1週間で4キロも痩せたとか。

しかし、生徒たちは知恩院・清水寺・法隆寺・東大寺など見るもの聞くものすべてが初めての体験であり、級友と堪能した。

関西修学旅行の詳細な報告書や生徒の紀行文は、当時の『進修』各号に数多くみられる。

満州修学旅行

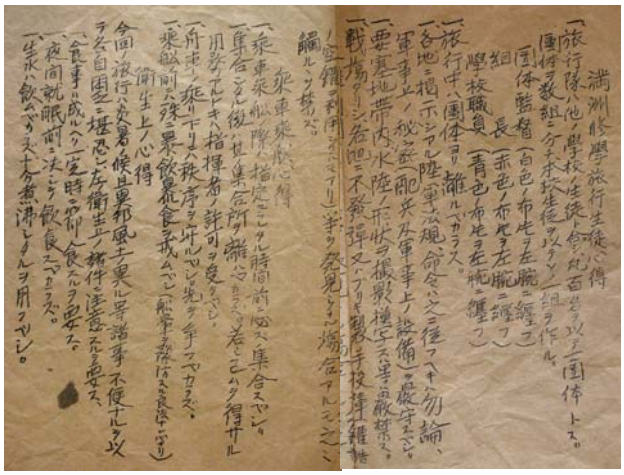
今年9月、茨城県近代美術館コレクション展が県つくば美術館で催され、茨城出身の画家3人の作品が展示された。その中の一人である永瀬義郎（中7回卒）は、満州修学旅行に参加している。

そもそも満州修学旅行とは、日露戦争後、第七高等学校（現鹿児島大）の岩崎行親が、時の陸軍大臣寺内正毅に**「血痕未だ乾かぬ戦地に引っ張って行って鉄鞭教育を施して見たい」**と訴え、賛同を得、軍部（陸軍省・満州軍）や文部省の支援を受けて実施されるようになった。下に示した本校に残る資料「満洲修学旅行生徒心得」には、**一、旅行隊ハ他ノ学校ノ生徒ト合シ、凡百名ヲ以テ一団トス。一、各地ニ掲示シアル陸軍法規、命令ハ之ニ従フヘキハ勿論、軍事上ノ秘密ヲ厳守スベシ。一、戦場タリシ各地ニ不発弾又ハブリキ製手投弾等ヲ発見シタル場合アルモ之ニ触ルヽヲ禁ズ。**などの文言が読み取れるように、かなり特異な修学旅行であったことがわかる。『進修』第10号に、本校からは遣澤校長引率の下、4年生の永瀬義郎や5年生の熊岡美彦ら7人の生徒が参加し、満州の山河、新戦場を歴覧し、帰国後報告会を開いたという簡単な記述があるが、報告内容の詳細は載っていない。

その後、日中戦争の本格化、太平洋戦争開戦などによって、鉄道などの輸送機関は軍用が優先されたため、満州修学旅行は行われなくなった。

本校では毎年、奈良・京都・伊勢方面への修学旅行を続けてきたが、昭和13年、時局に鑑み、県の県外修学旅行禁止通達により、取り止める。しかし、翌14年には復活し、15年には聖地巡拝旅行と称して実施したが、昭和17年の聖地巡拝なる関西修学旅行を最後に、本校の学校行事から修学旅行が消えたのである。

満州修学旅行生徒心得



京阪地方修学旅行報告書

Acanthus

第８号

平成２０年１２月１０日

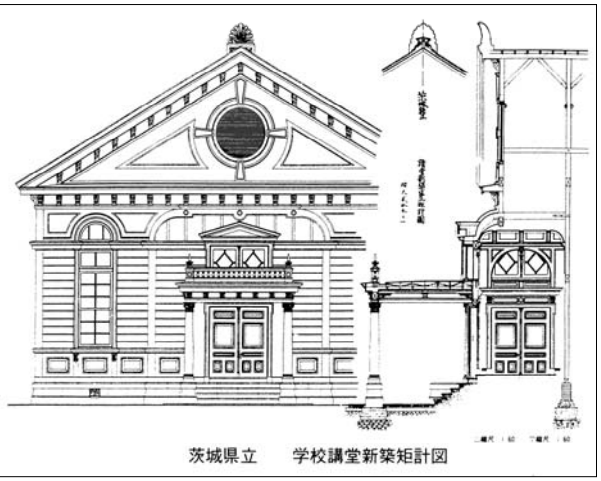
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会

旧本館活用委員会

旧太田中学校講堂

左の写真は，本校旧本館と同時に国の重要文化財に指定された茨城県立太田一高の旧講堂です。設計者も同じ駒杵勤治。竣工したのも明治 37 年 12 月ということで，本校旧本館とは，双子のような関係の文化財です。この建物が重文に指定された経緯は，本校出身で建築史研究家一色史彦氏(高 11 回)による調査研究によるところが大きい。一色氏は昭和 49 年９月，駒杵氏の設計類例調査のため，龍ヶ崎一高を訪れ，取り壊し寸前の旧本館階段下の物置に保管されていた講堂の設計図に出会った。この設計図には「茨城県立　　学校講堂新築矩計図」とあり，実際に，この空欄に校名を入れ，４校の講堂がほぼ同時に建設されたことがわかったのです。

講堂設計図



四つ子のハイカラ講堂

龍ヶ崎一高に保管されていた一つの設計図(14 枚)によって建築された講堂は，旧太田中(現太田一高)・旧龍ヶ崎中(現龍ヶ崎一高)・旧水海道中(現水海道一高)、それに旧水戸高等女学校(現水戸二高)の４校の講堂であった。水戸女学校の講堂は大正７年の水戸の大火によって焼失してしまい、龍ヶ崎一高及び水海道一高の講堂は老朽化と新しい施設建設のため、昭和 40 年代に取り壊されてしまい、現存しているのは太田一高の旧講堂のみである。

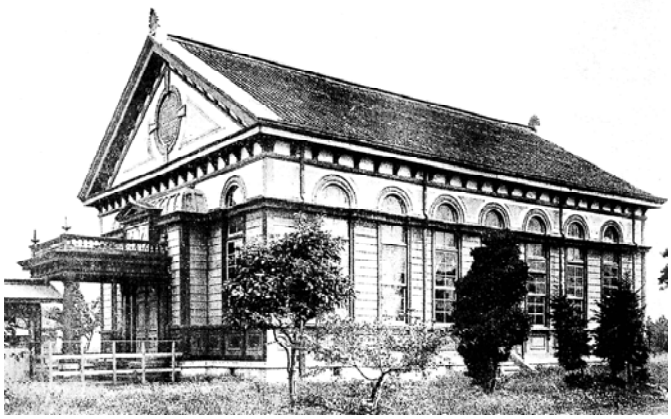
それにしても県の文化財保護審議会委員でもあった一色史彦氏の業績は大きい。

彼は昭和 49 年８月、土浦一高本館の正面玄関屋根裏の小屋束に釘打ちされた一枚の棟札を発見し、設計者駒杵勤治の存在を明らかにした。さらには同年９月に龍ヶ崎一高に保管されていた設計図を調査することで、これら建築物の文化財的価値を確認した。これで土浦一高旧本館と太田一高旧講堂の、旧制中学校校舎としては全国初の国重文指定が決定的なものになったのである。因みに本校旧本館の棟札には、

表「上棟式　大棟梁茨城県技師工学士駒杵勤治」
裏「明治卅七年七月五日　請負人石井権蔵」

とあり、発見者の一色氏は「明治の茨城に開花した駒杵勤治」(『常総の歴史』第 22 号)で、一般に建造物の文化財指定で棟札という資料は重要なものであり、とくに旧本館の棟札は建築史の世界では第一級の資料であるとして、昭和 51 年２月３日、本館と共に文化財に指定されたのだと述べている。**【この棟札は旧本館校長室に展示してある】**

太田一高旧講堂の重要文化財としての指定理由を、文化庁の調査によると、「明治時代の洋風建築としての重要な遺例であり、損傷も少なく堂々としている。これは設計者と請負師の技術と心が合致していたことと、特に御影石の質と工法のすばらしさに起因する。」としている。また、「思い出がいっぱい詰まった旧講堂は、今なお威風堂々と母校の北側に残っている。百年を超える太田中、太田一高の歴史をじっと見続けてきたに違いない。」『益習の百年』(太田一高百年史)と記しており、母校のモニュメントとしてその役割を果たし続けている。



旧水海道中学校講堂

現水海道一高セミナーハウス（亀陵会館）

リニューアルされた講堂

水海道一高は創立百周年を迎え、記念事業として「済美会館の整備」などを掲げ、募金活動を開始したが、県費負担によりセミナーハウスが建設されることになったため、記念事業は「セミナーハウス設備整備」に変更された。『済美百年』(水海道一高百年史)には、「このセミナーハウスの基本設計図が同窓会役員会で初めて公開された時、思い出深い旧講堂の外観を模した設計は大好評で、出席者の間からは口々に〈ああ懐かしい。昔の講堂によく似ている。これはいい〉との声が上がった。」と記されている。

旧太田中の講堂と同じ設計で同じ時期に竣工した旧水海道中の講堂は、昭和 48 年に老朽化のため取り壊された。講堂内部の部材の一部や玄関車寄せの柱頭飾りなどが保存されているものの、この時点で旧制水海道中時代を物語る建物類は全て姿を消したのである。それだけに、平成 12 年に、外観を旧講堂に模したセミナーハウス（亀陵会館）の完成は同校卒業生たちにとって往時を偲ぶ拠り所となった。

旧富山県立農学校本館

Acanthus

第９号

平成２１年１月１６日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会

旧本館活用委員会

現在の高等学校で国重文指定の校舎を持つ学校は５校あります。それらは，本校と前号で取り上げた本県の太田第一高等学校の旧講堂のほか，福島県立安積高等学校，富山県立南砺総合高等学校福野高等学校，岡山県立津山高等学校の旧本館です。いずれも，水海道一高の同窓生や地域の人々が，外観を旧水海道中学校の講堂に模して建設されたセミナーハウスに感激し愛着と誇りを持っているように，それぞれにおいて創立期以来の学び舎に限りない愛着を持ち，保存に尽力し現在に至っています。今回は富山県の福野高校「巖浄閣」を紹介しましょう。

旧富山県立農学校本館「巖浄閣」

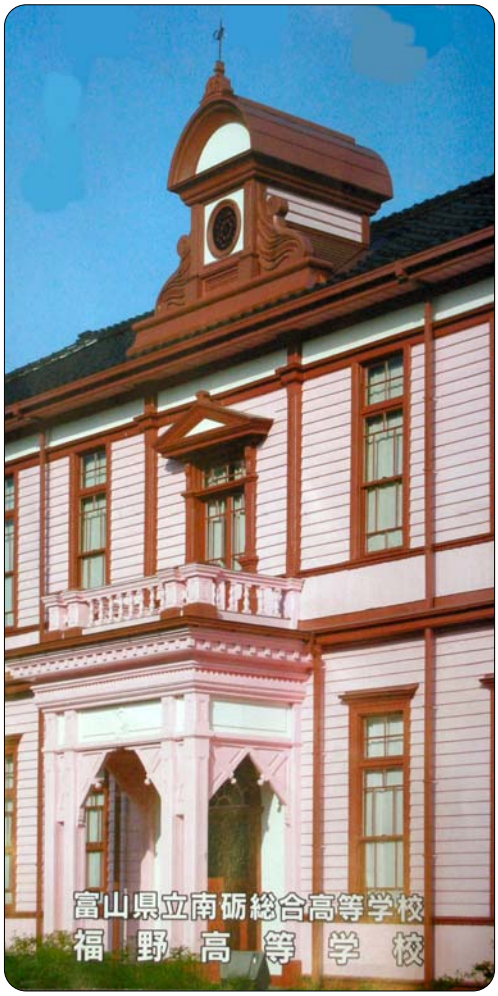
明治の宮大工が設計・施工した洋風建築

南砺総合高校は，平成17年4月、南砺市（砺波平野に位置）にある富山県立高校4校が連携して発足した。その中の1校、福野高校に、平成9年5月、国から指定された重要文化財、旧富山県立農学校本館「巖浄閣」がある。

富山県立農学校は、明治34年10月母体である富山県簡易農学校（明治27年創立）を改称・創立された。簡易農学校は、天保9(1838)年砺波郡の素封家、島家に生を受けた巖氏の献身的活動を基に誕生した。氏は砺波地方の産業育成には、人材養成機関としての農学校設立が緊要であるとして、早くから県当局や地方有力者に熱心に説き続けていた。

しかし病魔におかされ再起不能を知り、農学校を建設して欲しいと遺言し、資産の大部分を県令に遺贈、明治12年、42歳の若さで亡くなった。氏の遺志は地方有志に受け継がれ、その熱心な運動によって、15年後に結実した。

富山県立農学校とはなったものの、廃校となっていた小学校の教場を利用するなど校舎には不自由していた。



巖浄閣玄関屋上のゲーブル（屋根飾り）

明治36年4月、高燥・眺望に恵まれた新天地に、和洋折衷木造二階建ての本館と左右両翼に平屋建の教室棟から成る新校舎が竣工し、移転することができた。

新校舎を設計し施工したのは、地元の宮大工藤井助之丞氏である。当時の日本における民間の建築技術の水準の高さがいかなるものか推測できると思う。この本館こそが、巖浄閣と名付けられる学び舎である。

昭和43年新校舎建築のため、二階建て本館部分を現在地に修復・移築した。それを機に同本館を島巖氏に感謝し、氏の先見と遺徳を讃え「巖浄閣」と命名された。

建物の様式

本校旧本館はゴシック様式であるが、この建物はコロニアル様式である。木造下見板張りペンキ塗り、上げ下げ窓の西洋建築のデザインを基本とし、玄関ポーチ部分は建物から突出している。その上方はベランダとなっていて、二階の壁面はまっすぐに通っている。ポーチ上の窓だけがギリシア風の飾り窓になっている。その上方の二階屋根に特徴のあるゲーブル（飾り屋根）がのっている。玄関の開き扉の上は半円形の欄間となっている。

縦長な上げ下げ窓や外壁の下見板張り、復元された正門の門柱など、わが旧土浦中学校に共通する部分が少なくない。

保存と活用

平成9年、国から重要文化財に指定され、平成14年に保存修理が始まり、17年8月に完工し、正門も復元され、建築当時の姿を現した。

移築後、「島巖記念室」ほか展示室などを設け、生徒の利用にも供していたが、現在では「富山県立美術館移動美術展」、「特別企画展」、「コンサート会場」など、外部に向けても多様に活用されている。その活用には「保存活用委員会」が当たっているが、地域は勿論県レベルでの保存と活用がなされ、文化活動上、重要な拠点の役割を担うに至っている。

《宝の持ち腐れ》にしないために

全国には、文化財の指定こそ受けていないが草創期の校舎を有する高校は数多くある。移築改装して記念館・資料館・現役教場として保存・活用している例が多い。

重文指定の校舎では、通年一般に公開されている前述の「巖浄閣」や郡山市の郷土博物館として開館している安積高校旧本館は、既に大がかりな解体修復を済ませ、文化財としての在るべき姿を確立しているといえよう。

本校旧本館は、限定的な公開に止まり、活用面でもまだまだの感があり、建物の保存・活用になお一層の創意工夫が必要である。

旧土浦中学校本館は、他の重文校舎と比べても決して見劣りするものではない。掛け値なしに第一級の文化財校舎である。しかし、専門家の調査で、眼に見えない建物内部にかなりの老朽化が確認されている。このままの状態が続けば近い将来、間違いなく朽ち果ててしまう。何としても全面的な解体復元修理による保存こそ緊急の課題である。その実現には、同窓生、地域の人々や県や国の理解と支援が必要である。

Acanthus

第１０号

平成２１年２月１７日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

土浦中学校第１回卒業生（明治35年３月）　↑

今年の卒業式は,３月２日,全日制は６１回目,定時制は５８回目ですね。茨城県土浦中学校の第１回卒業式から数えると１０８回目です。左の写真は第１回卒業生の記念写真です。和服に制帽という出で立ちに時代を感じますね。写真もさることながら,奇跡的に残されていた第１回卒業証書授与式に関する詳細な記録があり,それによって当時の卒業式の様子がわかりました。卒業証書の番号は,中学校第１回の１番から通し番号になっています。今年卒業する貴方の証書番号は何番になるでしょう。そう考えると感慨深いものが去来しますね

第１回卒業証書授与式記録　↓

第一回卒業証書授与式

新装立田校舎で盛大に挙行

右の「第一回卒業証書授与式記録」を原文のままではないが、その一部を記してみよう。

五星霜決して長くはない。然し蛍雪の苦学の五星霜十星霜にも当たる。此の長日月の間、寒暑を物の数ともせず勇ましくも業なし終へし我校の健児、三月二十八日を以て証書授与式を挙行せられんとす。連日の雨も全く上がり、満空拭へるが如く晴れて、天も亦是に祝意を表してくれている。玄関前に大緑門を立て之に卒業式の額を掲げ旭旗を交叉し立てた。正面には御勅語を掲げ旭旗を交叉し紫幕を張り花瓶に桃柳を挿し美々しく装飾してある。式は以下の順序で進められた。

生徒は運動場に整列し知事を歓迎。

《卒業式の開始》第一鐘を以て講堂に一同着席す。第二鐘にて職員及び来賓併に父兄着席す。第三鐘　囃喨奏楽の内、校長が先導して河野知事が臨席すると、一同敬礼。

《証書授与》君が代の奏楽の后、福山校長、卒業生三十二名に一々卒業証書を授与。四・三・二・一の各生には総代に学年修業証書授与。一学年間品行方正学術優等者には褒状を総代に授与。

《祝詞》学校長　福山校長雄弁を振るい祝詞を述べ、次に卒業生の如何は学校の名誉運命に関す。殊に第一回の卒業生は世人より大いに注目せらるるものなれば決して軽忽の行為ある可からず云々と訓戒あり。

職員総代　村田教諭真情溢るるばかりの祝詞を朗読。水海道分校岡野教諭より卒業式を祝すとの祝電ありたりと告ぐ。

《来賓祝詞》河野知事が登壇祝詞を朗読。〈以下、県会議員・新聞記者・水戸中学校長などから祝詞が述べられ〉、次に父兄総代藤田重文氏式辞を朗読せらる。

《答辞》生徒総代、中山庄一郎の答辞朗読。

《式終了》整粛の内、式全く終り、奏楽演奏。

《来賓退場》知事に続いて以下退場。

以上が記録に示された式の概要であるが、機関誌「進修」第４号（明治35年９月刊）にも第１回卒業式について次のような記載がある。『花笑ひ鳥歌ふ春、霞ヶ浦邊に現出して、分校となり、本校となりし、我茨城県立土浦中学校は、其建立より五年の星霜を閲して、（中略）待ちに待ちたる第一回卒業式を挙行しぬ。（中略）あはれ今日は、年来睦びに睦びし、校舎、教師、校友に袖を別つかと思ひば、落涙止むべからず、（中略）蛍雪多年の功力著れし、卒業生諸君いかに愉快なるぞや……』

なお式に列席した来賓は県知事をはじめ、視学官・県会議員・税務署長・警察署長・土浦監獄支署長・小学校長・町長など地元名士三十数名、その数卒業生を上回るものであった。

半途退學者調（概要）

入学年度	入学者数	卒業者数	半途退学者数	半途退学者の百分比
三十七年	一〇五	四〇	六五	六一・九
三十八年	一三〇	五一	七九	六〇・八
三十九年	一二〇	三九	八一	六七・五
四十年	一三五	四六	八九	六五・九

退学ノ原因
一、家事都合　一、成績不良　一、轉学

入学者の六割は半途退学

左上の資料は、明治30年代後半の中途退学者状況調である。明治35年の卒業生は入学当初80名の四割にすぎなかったが、その後もこの傾向は変わらず、中途退学者は入学者の六割を超える状態が続いた。真鍋台校舎が完成して間もない明治39年の入学者は１２０名であったが、卒業したのは僅かに39名であった。

中途退学は落伍か？

中途退学の原因は資料にもあるように家事都合、成績不良、転学が挙げられている。それぞれの員数は示されていないが、転学はそれほど多くなかったと思われる。旧本館に保存されている明治36年度の「学年試業成績表」に全生徒の考査成績が成績順に記載され、合格点に達しなかった者は総数で76名に達し、落第となっている。こうした落第者は原級に留まるか、退学するかを余儀なくされた。学業の厳しさに耐えきれず、学舎を去る者が少なからずあった筈である。

卒業式では、卒業証書授与の他に学年修業証書授与も行われた。土浦中学校で「１年間修業した」・「３年間修業した」という重みのある証書が各学年修了者に手渡されたのである。当時、中学校に進学する者は極めて少数の限られた子弟であった。中学校に入学し、何年か勉学するだけで、それなりの社会的意味を有した。入学が卒業と直結するものとは、必ずしも考えていなかった当時の社会通念があった。こうした時代背景を考えると家事都合という理由で退学した者がかなりの数にのぼったのではないだろうか。

中途退学がそのまま挫折とは限らなかった。土浦中学校で何年間か学業に精進したこと自体が高く評価されたのである。

Acanthus

第１１号

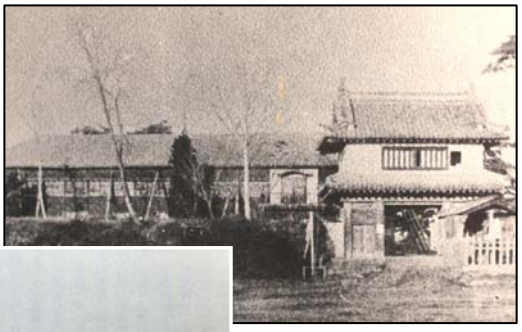
平成２１年３月１７日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

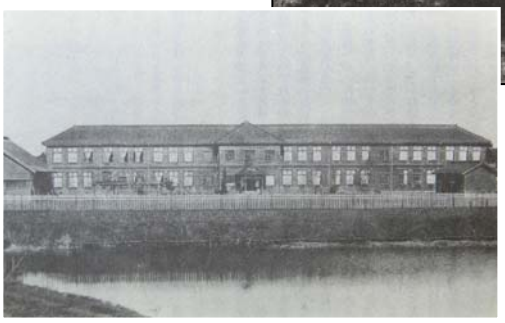
平成 20 年度　卒業証書授与式　↑

去る３月２日，卒業式（全日制）が挙行され，３年生３２１名が本校を巣立ちました（(定時制卒業式は１３日・卒業生 24 名)。

１０８年前の明治３５年３月２８日に，土浦中学校第１回卒業生３２名を送り出して以来，卒業生総数は２９,８９２名となりました。卒業生が３万の大台目前に至ったこの機会に，土浦一高の前身，土浦中学校の生い立ちと草創期の様子を紹介しましょう。下の写真は明治期の亀城の一角です。櫓門の左後方の建物は新治郡役所です。ここで土浦一高は，茨城県立尋常中学校土浦分校としてその産声をあげたのです。

亀城櫓門と
新治郡役所 →





← 立田町に完成した新校舎
（現土浦二高旧校舎）
（昭和４４年取り壊された）

教職員４名で開校

明治30年３月４日の茨城県知事の告示で、茨城県立尋常中学校土浦分校は、下妻分校と共に設置されることとなった。これに基づき、７日に郡役所で事務を開始した。14・15日の両日、入学志願者１９３名に対し、土浦高等尋常小学校校舎を借りて選抜試験を行い、18日、80名に入学を許可し、５日後の22日に授業を開始した。大変慌ただしい開校であった。しかも生徒を収容し授業を行うべき校舎を持たずにである。

教職員は、分校主任（倫理・英語・国語担当）と体操担当・算術担当の教師３名、それに書記１名の計４名であった。同年８月に博物担当の教師が赴任して加わったが、僅か５名の教職員と80名の生徒でスタートしたのである。

当時の授業内容は、不明な点が多いが英語・作文・国文・漢文・算術などで、体操は兵式体操、３年からは銃を執り、発火演習（軍事教練）なども行った。

開校直後から、生徒の自主的活動が活発に行われ、生徒間に幾つかの親睦会が生まれ、正科以外の身体精神の自己啓発の場へと発展した。同年12月には統合して進修会を発足させ、以後、学校生活の核としてその活動内容を拡充していった。機関誌「進修」の臨時号「創立十周年記念録」（明治40年11月刊）で、『正科を筋骨とすれば、この会は血脈である』と評価している。

さまよえる土浦分校

独自の校舎が無いまま開校した土浦分校は、郡役所二階で授業を開始したが、２ヶ月後には土浦尋常小学校校舎の一部を借用して移転した。翌年４月には、一年生は小学校校舎、二年生は内西町の民家（現関東つくば銀行駐車場）に移り仮校舎とした。32年度になると、一年甲乙両組は小学校女子部校舎内に、丙組は郡役所の控室に収容されたが、９月には一年生全員が内西町の工場跡地の建物に移るというように、土浦分校は教場を求めて転々と彷徨った。さらにこの年の秋には大雨により霞ヶ浦が氾濫。内西町の仮校舎は浸水し、10日間も臨時休業に追い込まれるなど苦労の連続であった。

土浦分校の校舎建設が進まず、仮住まいを繰り返していた背景には、当時の土浦町と真鍋町との間における中学校誘致を巡る激しい争いと県議会議決の二転三転があった。

立田に待望の校舎完成

県議会は最終的に真鍋台建設を可決したが、県当局はこの建議を採用せず、校地を土浦町立田に決定した。そして明治32年12月、ようやく新校舎は完成した。洋風二階建て本館１棟と生徒控所兼雨天体操場１棟からなり、本館には８教室と二階中央に講堂が設けられていた。

分校創設以来、学び舎が定まらず、三ヶ所に分設された教場で不便な学校生活を余儀なくされていた生徒たちは、やっと安住の地にたどり着いた。同年12月21日、広壮な立田校舎に移転し、一同歓喜に浸った。その感動は「進修」創刊号（明治33年1月刊）に詠い上げられている。

『立田の朧間、数宇巍然として高く雲間に聳ゆるもの、是れなむ我が茨城県中学土浦分校なる。長の年月待ちに待ちたる新しの学び舎なる。』

しかし、結果的には、ここも数年間の仮住まいでしかなかった。現在の真鍋台校舎が完成（明治37年12月）し、移転（明治38年３月）するまで、なおしばらく流離いは続いたのである。

「進修百年」（創立百周年記念誌・平成９年11月１日刊）によれば、土浦中学校の基礎は、図書閲覧室の開設、運動場の整備、校訓の制定、寄宿舎の建設などが進められた明治40年代に確立されたと記している。

これに先立つ明治30年代はまさに完全な無からの出発で、生みの苦しみと闘う千辛万苦の10年間であった。

この先輩たちの学校創設に注いだ努力と情熱によって形成された基盤と理念こそが、その後の土浦中学校・土浦一高を培ったと言えよう。

三万に及ぶ卒業生たちが築き上げてきた伝統と校風、百余年の風雪に耐えて聳え立つ文化財の旧本館、これらは何ものにも代えがたい本校の有形・無形の遺産である。君達はこの恩恵に浴しながら、今ここで学ぶことができる幸運を噛み締めると共に、この遺産の価値をさらに高めて、土浦一高の新たなビジョンを描いて欲しい。